高校生のインターネット利用に関する意識と実態
―ルール作りの効果に関する検討―

○金綱知征（香川大学）　家島明彦（大阪大学）
戸田有一（大阪教育大学）

キーワード：高校生，ネット利用，ルールの効果

問題と目的

今日，高速通信を可能とするネットワーク環境の整備や，スマートフォンなどの携帯型高速通信機器の急速な発展と普及に伴って，ますます多様化・複雑化したインターネット（以下ネット）環境において，子どもたちは様々なリスクに直面している。ネットやゲームの過剰使用による睡眠不足や集中力低下等の「ネット依存」問題，SNS 上での誹謗中傷や個人情報暴露等の「ネットいじめ等」の問題，不特定多数の閲覧者を不快にさせる「不適切な投稿」による炎上事件，安易な動画等の投稿・拡散による「児童ポルノ事件等」の犯罪への巻き込まれなど，児童生徒に関わるネット上での問題行動は多岐にわたり，今日の学校が取り組むべき喫緊の生徒指導課題の一つとなっている。

ところが,保護者や教員など周囲の大人たちが,子どもたちのネット上での活動状況を細かに把握することは非常に困難であり，子どもたちの無自覚なリスク場面への接近・接触を見逃してしまうことも少なくない。このような状況の中，子どもたちをネット利用上のリスクから守るためには，大人の側が子どもたちの利用実態の把握に努めることも重要であるが，子どもたち自身がネット上で遭遇する様々なリスクについて正しい知識を学び，学校や家庭においてネットやスマホの利用に関わるルール作りをするなど，子どもたちの主体性・自律性に基づいた適切なインターネット利用に向けた指導･支援が求められている。本研究は，スマホや携帯の所有率が高くネット利用も最頻と思われる高校生を対象に，家庭内でのルールの有無やルールの順守の程度が実際の利用実態や利用意識に及ぼす影響について検討した。

方　法

公立高校生 1,055 名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙では，利用頻度，利用時間，利用内容等のネット利用実態に加え，家庭内ルールの有無，ルールの順守の程度とネット上での被害及び加害経験について尋ねた。またリスク認知や被害不安，匿名性に関する信念や道徳不活性化の程度など，ネット利用に関わる心理的な側面についても尋ねた。本報告では家庭内ルールの有無やルール順守の程度と利用実態やリスク事態への関与との関連について検討した。

結果と考察

本研究対象者の内，家庭内で何らかのルールを決めていたのは 35%であった。また家庭内にルールがあるとした 35%の内，そのルールを守れていると回答した者は 86%であった。家庭内でネット利用のルールを決めている者は少数派であるが，ルールを決めている者の多くはそのルールを守ってネットを利用していた。

家庭内ルールの有群と無群についてネットの利用実態の違いを検証すると，利用頻度には違いは見られなかったものの，利用時間については，平日休日ともにルール無群の方が利用時間が有意に長く，また遅い時間帯に利用する者が有意に多いことが明らかとなった。

一方，ネット上での種々の被害及び加害の経験については両群に有意な差異は見られなかったが，ネット依存傾向を示す「ネットやゲームがやめられなくなった」,「ゲームアプリやネットゲームで大金を使ってしまった」,「ネットやゲームがやめられず睡眠不足になったり，朝起きられなくなったりした」等の項目については，ルール無群は有意に高い値を示した。

ネット上の被害に対するリスク認知や被害への不安感はいずれもルール有群の方が有意に高かったことから，ネットを利用するにあたって一定の危機意識をもち，正しく怖がることが，利用のためのルール作りと相まっていることが推測された。一方で,「ネット上では何を発言しても特定されることはない」等のネットの匿名性に関する誤った信念や,「ネット上で誤った発言をした人がその後に中傷されたり個人情報を暴露されたりするのは仕方がない」といった道徳不活性化の程度は，ルール無群が有意に高い値を示した。ネット利用に関わる適切なモラルとリテラシーの獲得と，家庭でのルール設定という自主的・自律的なネット利用との間にも関連があることが示唆された。

付　記

本研究は，科学研究費補助金基盤研究(C)「生徒のインターネット上の問題行動の実態と学校の対応方針とのマッチングモデルの検証」(課題番号 19K02686・研究代表者 金綱知征）による研究活動の一環である。